

初期嚟本におけることわざについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23730

初期噺本におけることわざについて

古 保 勲

一. はじめに

近世笑話集の嚆矢とも言える『戲言養氣集』（『未刊隨筆百種』第四卷）次いで出された『きのふはけふの物語』（『神宮文庫蔵 古活字版十行天理本を底本』）『醒睡笑』（『東京大学付属図書館 葵文庫蔵 噺本大系第二巻』）の三本はほぼ同時代に刊行され、相互に共通の話も多く、初期噺本としても関連深いものと考えてよい。そこで、『戲言養氣集』『きのふはけふの物語』『醒睡笑』の三笑話本について、ことわざがどのように使用されているか比較を試みたのが今回の調査である。

ことわざについては次のことわざ集について確認をして、同時代のことわざとの比較もあわせて行なった。

- 毛吹草 松江重頼選 正保二年刊（岩波文庫）
- せわ焼草 僧 空願編 明暦六年刊（ゆまに書房）
- 譬喻尽 松葉軒東井編 天明六年刊（同朋舎）
- 諺苑 太田全斎稿 寛政九年刊（新生社）

二. ことわざについて

口頭による表現のあやとしての諺は、もともと「俗人の伝えたことば」^(注1)という意味にとれる。さらにその諺が定着してゆくなかにも、たんに人びとの口にのぼる言い伝えという以上に、説話、伝説などの口語りを要約するという経過をたどらねばならなかった。^(注2)とすれば、初期噺本の中で使われることわざが民間伝承（俗説であったにしても）を民衆に伝えるための方法として、笑話のスタイルを用い、ことわざを冒頭もしくは結末に位置して印象付けようとしたのは当然の理と言わなければならぬ。また、文中に用いられている場合には、比喩、教訓性を含んだ句として定着している。これは、ことわざ本来の用法から来していると思われる。

A 冒頭もしくは文末にあることわざ

○ 冒頭に用いられている場合

- ある人、ひょうたんから、こまのいてたる、まを見て、これは、何としたるいはれそと、人にとふ、それさへ、御そんしなきか、そふして、まき駒と申すは（下略）『きのふはけふの物語』上3段 瓢箪から駒も出まひし（譬喻尽）
- まき駒の説話のきっかけとして用いられている。

『醒睡笑』においては、巻一 謂被謂物之由来に多く出てくる。

「——ということとは」——とは「——といふ事なんぞ」——とは何ぞ」という形式で始まり、その後で定義づけ（多くは民間の語源解説）が行なわれるという形になっている。

以下は、謂被謂物之由来の説話番号順にことわざを例示する。注釈は角川文庫脚註を参考とした。

17 話 瘦法師の酔このミとは、（以下略）

瘦法師の酔好み（せわ焼草） 瘦の酔好み（譬喩尽）

ヤセ児ノ酔コノミ（諺苑）

不利と知りながらあえて行なう者が多いたとえ。

23 話 あさ誦ほうたハぬ事とも、又朝うたひハびんぼうの相ともいひ伝へたり。（下略）

朝歌は不レ唱もの貧乏神が来る（譬喩尽）

24 話 へちまの皮ともおもハぬとハ、（下略）

へちまのかはともおもはず（毛吹草） 糸瓜の皮の段囊

（譬喩尽） 糸瓜ノ皮ノダン袋（諺苑）

全然意に介しないこと。

25 話 世間に下手なる者を醜鈍くらひと云事ハ、（下略）

うどんの湯（せわ焼草）

戲言養気集上 耳にかへてうどんくふたる故事にもこのことわざが使われている。

33 話 あへてふためき、前後を忘したるを、とち目になってたづねたハ、とちめになりてはしりありきたるハなといふ事、なむのゆへぞや。（下略）

とちほどのなみだ（毛吹草） 襟程な涙盈して（譬喩尽）

椀麵棒ヲ掉（諺苑）

37 話 娘ひとりに髻三人と云事ハ、（下略）

女一人二婿八人（諺苑）

望む者が多過ぎて処置に当惑することのたとえ。

41 話 世話に鬼味噌と云ハなんぞ。（下略）

鬼味噌じゃ（譬喩尽） 鬼味噌（諺苑）

見せかけは鬼のようだが、内心は臆病な人

43 話 娑婆で見た弥次郎かともいはぬとハなんぞ。（下略）

娑婆で見た弥次郎かとも思はぬ（譬喩尽） 閻婆ヲ見タ弥次郎

（諺苑）

○文末で用いられている場合

「きのふはけふの物語」の例では上5段で、小路を小牛と思ひ違ひをしたことに対する評語として文末に「京にもる中とは、これらをさしてか」と用いている。

京にゐなかり（毛吹草） 京の田舎ありじや（譬喩尽）

京ニイナカアリ（諺苑）とことわざ集にもよく出てくるので当時人を批評することわざとして用いられたのであろう。

「醒睡笑」で文末に出てくることわざを見ると、説話全体の評論として教訓性を含んだものが多く、笑話で民衆を教化しようとした意図が感じられる。

● いはぬへいふにまさるとやらん（18話）

二番にかまへられたる髻殿の下手な時宜に対して、しゃべって

卷一 鈍副子

● いはぬへいふにまさるとやらん（18話）

二番にかまへられたる髻殿の下手な時宜に対して、しゃべって

ぼろを出すより黙っている方が賢明だという意。

いはぬはいふにまさる(毛吹草) 謂はぬは謂ふに増さる(譬喩尽) イハヌハイフニイヤマサル(諺苑)

巻一 祝ひ過ぎるもぬな物

●おもひ内にある事を、色外にいはふことばぞや(9話)

商人が元旦に宿主に言つた言葉を評して用いたことわざで、心に思うことは自然に言動となつて外面にあらわれる意。

思ひうちにあれはいろほかにあらはる(毛吹草) 思ひ内に有れば色外に顕る、(譬喩尽) 思ヒ中ニアレハ色外ニアラハル(諺苑)

卷二 貴人の行跡

●大名は大耳なれや(8話)

大名は大揚で、こせこせしたことは耳をかさぬ、という意味のことわざ。

大名やうは大耳(毛吹草) 大名は大耳(譬喩尽)

大名大耳(諺苑)

卷四 いやな批判

●うはか年代記にて、いよいよしれす(1話)

老婆の心覚えは最も重要な年代があやふやで、ただむかしといふ一語に総括され、結局あてにならない。

●これをや、草つとに国かたふくとも申つべし(12話)

鳶と鷺とのわる口に対し鷺が批判したとき土産の用意の良い方を勝としたことに対する評である。

くさづとにくにかたふく(毛吹草) くさづとに国かたふく(せわ

焼草) 草土産に国傾く(譬喩尽) クサヅトニ国カタフク(諺苑)

日文中に用いられている場合

「きのふはけふの物語」では特徴的なものをあげるとすれば、教訓的なものと比喩的(たとえ)なものに分けられることである。

●上37段 もとのめに、なかうとなし

●上37段 もとのめに、なかうとなし
●上58段 相は別の、もとの

●上58段 相は別の、もとの
あふはわかれ(毛吹草) 逢ふは別れの始めといへり(譬喩尽)

●上68段 春のゆめは、あはぬもの

このことわざは『戲言養気集』上 うたの事にも「そふじて春のゆめは、あひかぬる物じや、御心やすかれと申された」と同じような形で用いられている。

比喩的なものとして上27段の説話があげられる。

先、かつげやみの、ほうろくあきない

たかにつけたる馬の、きしのはそみちつたう

目くらの、くたりさか

わかきしゅうとめと、むこと中よき

やめめ男の、よめと中よきも

このふんちやと、かたる(後略)

この中で「たかにつけたる馬の、きしのはそみちつたう」は「瘦馬に重荷、瘦馬の道いそぎ」と言い換えることができる。

『戲言養気集』下久蔵が故事に「此せつしやうきんだんの所に
をひて、月夜にとぢやうをふむぞとがむれば」があり、油断もは
なはだしいたとえとして用いられている。『きのふはけふの物語』
(大東急文庫本上26)、『醒睡笑』卷三 自墮落4に類話がある。
これらの文中のことわざは、本来の機能でもって話をわかり易く
するために用いられていると思われる。

『醒睡笑』では、経験した知識・教訓を伝えるためにことわざを
用いている例として、次の20例がある。

比喩的なことわざ

1 しんはなきより (巻一 ふほととのる5話)

しんはなきより (毛吹草) 親は泣きより他人は食より (せわ焼
草) 親は泣寄他人は食寄 (譬喩尽) 親ハ泣ヨリ (諺苑)

不幸を心から悲しんでくれるのは骨肉の者だけで、他人は弔問
に來ても飲み食いが目的で、真実の気持ちから集まってくる者は
いないこと。

2 しハす油ハかからぬ (巻一 鈍副子19話)

師走油盈せば火に崇る盈せし者に水を灑ぐべし (譬喩尽)
師走油ヲコボセバ火ニ崇ル (諺苑)

師走油は火にたたるという俗信

3 柿団扇ハ貧乏神のつく (巻一 祝ひ過ぎるも異なるもの4話)

柿うちわは貧乏神が好くということわざ

4 めいハしよくにあり (巻四 そでない合点27話)

めいハしよくにあり (毛吹草) 命は食にあり (せわ焼草) 命は

食にあり (譬喩尽) 命ハ食ニ在 (諺苑)

5 人穴の勸進 (巻四 唯有5話)

6 雪はほうねんの御調物 (巻七 諺22話)

雪ハ豊年ノ瑞 (諺苑)

このことわざは謡曲光悦本 難波に「雪は豊年のみつきもの」
と見える。

教訓的なことわざ

7 うなめかたをれ (巻一 落書31話)

ウナメ (牝牛) の売買にはとかく損をしやすいくこと

8 少年にまなびざれば老後にしらず (巻二 貴人之行跡9話)

9 勝て甲の緒をしめて候よ (巻二 貴人之行跡11話)

かちてかふとのを、しめよ (毛吹草) 勝て甲の緒をしむる (せ
わ焼草) 勝つて兜の緒をゆる (譬喩尽)

勝テ胄ノ緒ヲシメロ (諺苑)

武将の心構えの教訓

10 積善のよけい (巻三 不文字3話)

積善のいゑにはよけいあり (毛吹草) 昔善の家には余慶あり

(せわ焼草) 積善余慶 (譬喩尽)

善事を行なっていれば、その報として子孫に仕合せがあるとの
意

11 をしくほしくのあらそひ (巻四 聞た批判10話)

まったく利害が対立し妥協の余地がない争い

12 孝ハ百行の始 (巻四 聞た批判11話)

孝は百行の基 (譬喩尽)

13 運ハ天にあり (巻四 唯有2話)

運は天に有(せわ焼草) 運は天に有り(譬喩尽)
運ハ天ニ在(諺苑)

14 金言逆レ耳行有レ理(巻五 上戸1話)
金言耳にさかふ(せわ焼草) 金言耳ニ逆フ(諺苑)

良薬は口に苦しと同義のことわざ

15 須レ為ニ心師一莫ニ心為レ師(巻五 上戸1話)

こころの師とはなれ ころろをしとせざれ(毛吹草)

心を師とする事なかれ(せわ焼草)

心の師とはなれ心を師と不レ師(譬喩尽)

心ノ師トハナレ心ヲ師トセザレ(諺苑)

謡曲大観 熊坂に

心の師とはなり心を師とせざれ とあるのでよく用いられた
ことわざである。

16 思の色を外にいふ(巻七 章分けの標題)

思ひうちにあれはいろほかにあらはる(毛吹草)

思ひ内に有れば色外に顕る、(譬喩尽)

思ヒ中ニアレハ色外ニアラハル(諺苑)

このことわざ 能狂言(岩波文庫) 花子に

思内にあれは色外に現はる、とある。

17 かうし門を出す(巻八 頓作20話)

かうじもんをいはず(毛吹草)

好事不レ出レ門 悪事行ニ千里一(譬喩尽)

好事門ヲイテズ悪事千里ヲユク(諺苑)

このことわざは

『戲言養気集』上 善悪出入のいさかひ

『きのふはけふの物語』下45段

に、ほぼ同話でかうじうりと僧の頓智話として出てくる。

18 光陰惜べし(巻八 しょうく1話)

19 とき人をまたず(同)

時不レ待ニ於人一(譬喩尽) 時人ヲマタズ(諺苑)

20 梅檀ハ二葉より(跋文)

せんたんは二ばよりかうばし(毛吹草)

梅檀は二葉よりかうばし(せわ焼草)

梅檀は二葉より香し(譬喩尽) 梅檀ハ二葉ヨリ香シ(諺苑)

注1注2 「日本語の歴史」3 (平凡社)

(石川県立金沢錦丘高等学校教諭)